人生を変えてくれた戯曲セミナー。

舞台に加え、NHK朝の連続テレビ小説『らんまん』の脚本などで大活躍中の長田育恵さんは、戯曲セミナーの卒業生です。

――長田さんは受講前に、ミュージカルを書いていたそうですね。

大学のときはミュージカル研究会に入っていて、卒業後は社会人をしながら、主にファミリーミュージカルを書いてました。でもそのうち現代演劇を書きたいと思い始めて。

ちょうどそのときに「戯曲セミナー」というものがあることを知って、ここでゼロから学ぼうと思ったんです。ちょうど30歳になるときでした。やっぱり転機だったのかもしれないですね。

――実際の講義はどうでしたか?

ミュージカルの脚本を書いてきたから、大体の基礎はわかってるんじゃないかなとも思ってたんです。でも講義で聞くことは知らないことばっかりでした。横内謙介さんやマキノノゾミさんや坂手洋二さんが挙げてくれた戯曲、何ひとつ読んだことがなかったんですよ。ともかく講師の先生方が挙げるものは全部読んで、芝居もそこから集中的に見て。

人間を書くんだっていうことも初めて知りました。キャラクターを書くのではなく、生の人間の皮膚の内側や息吹みたいなものを書く。

――そのほかに印象に残っている講義は?

土田英生さんの講義では、ふたりの人物の関係を5行の台詞で表すっていうのをやりました。

プロットの講義では、自分があまりに書けなくて愕然としましたね。でも、プロットを敢えて捻り出そうとすると、これまでなかった思考回路が現れる。それまでは主人公のことしか考えられなかったのがサブキャラクターのオープニングからエンディングまでの人生を大事に書けるようになったりもするんです。

長谷基弘さんから、事柄を一単位ずつカードに書き出して、シャッフルしてストーリーを組み立てるという話も聞いて、自分の歩き出す地面をちゃんと固めてから書き出すんだって思ったりもしました。

長田育恵　てがみ座主宰、NOTE Inc. 所属
劇作家、脚本家。1977年生まれ。東京都出身。2007年に日本劇作家協会戯曲セミナーに参加し、2008年、井上ひさし氏に師事。2009年「てがみ座」旗揚げ。2015年『地を渡る舟』にて文化庁芸術祭賞演劇部門新人賞。2016年『蜜柑とユウウツ』にて鶴屋南北戯曲賞。2018年『砂塵のニケ』・『海越えの花たち』・『豊饒の海』にて紀伊國屋演劇賞個人賞。2020年『現代能楽集X「幸福論」――能「隅田川より」』にて読売演劇大賞 選考委員特別賞。2021年NHK特集ドラマ『流行感冒』で東京ドラマアウォード・単発ドラマ部門優秀賞。近作にPARCO THEATER OPENING SERIES『ゲルニカ』、劇団四季ミュージカル『ロボット・イン・ザ・ガーデン』など。2023年放映のNHK連続テレビ小説『らんまん』を担当している。

――クラスの雰囲気はどうでした?
毎年だいたい50人くらい、10代20代の方から60代70代の方まで集まっています。

演劇は趣味っていう方たちもたくさんいて楽しい雰囲気でした。でも書くことを職業にしたいという、私と同じぐらい真剣な人もいっぱいいて。私も熱をもらうし、私が他の人のための熱にもなるし、どこまでがんばっても恥ずかしくないっていうのがすごく心地よかった。

――プロの劇作家を目指す人、趣味で演劇を学びたい人、映画や小説を志す人…このセミナーはどうでしょう?

どんな方でも受けて損なことはひとつもないと思います。人生の新しい引き出しを得られます。観劇が趣味なら、お芝居の新しい観点を得られる。小説やシナリオを書こうとしている方にとっても、作品の構造や柱の立て方、登場人物の行動原理を、こんなに教われる場所は他にはないんじゃないかな。

――戯曲を書くということについて思うことがあれば。

私はゼロの状態でセミナーに来て、それから劇団を旗揚げして、一作ごとに何かを克服するスピードが早くなってるなと我ながら思うんです。実践こそが一番の吸収だと思って必死になれたんです。だから、戯曲セミナーに来て実践の方法を手に入れると、変われるよって思います。

――戯曲セミナーに通ったことは、長田さんにとって、大きなことでしたね。

人生を変えてくれました。最初は小さな金額ではないから躊躇したんですけど、でもそれで未来への切符が手に入る。2007年の戯曲セミナーに来なかったら、私のいまは確実にないですから。

前川知大さんは現代を代表する劇作家の一人です。劇作だけでなく映画、小説、漫画原作など幅広く活躍しています。

――創作活動のスタートは映像からなんですね。

大学の映画サークルです。物語をつくりたいっていうのがベースにあって、シナリオを書いてはいたんですけど、卒業したら機材がなくて映画もつくれなくなった。で、シナリオや小説をいろいろ書いてみて、自分は会話が好きなんだなって気づいたんです。

その頃、映画に出演してくれた大学の劇研メンバーが劇団をつくった。何本か書かせてもらって、面白いから前川を座付き作家にしてやろうぜって始まったのがイキウメです。結成は2003年でした。

――前川さんの劇作のスタイルはどうやってつくられてきたんでしょう?

芝居の本を書き始めたころは、映画的に書いてしまってシーンも多すぎたんでしょうね。演出家にどうやっていいかわからないと言われた。それから演劇を観るようになりました。5作品くらい書いているうちに、映像みたいに書いている人もいるな、演出でどうにかできるんじゃないかなと思い始めた。そこでもう一度、カット割りでシーンが変わるような本を書いたんです。イキウメの2本目でした。

演劇のテンポ感というか、会話の密度みたいなものには徐々に慣れていきました。そうなると、演劇で表現できるものは映像より断然多い。

――劇団以外の公演も多く、映画、小説、テレビドラマ、漫画原作なども手がけていますよね。

いろいろやってるように見えて、実はそんなにたくさんのことはやってないんですよ。劇団の創作から派生したものを外に持っていくことが多くて。映画の『散歩する侵略者』と『太陽』もそうです。漫画は、演劇の好きな編集者が、前川さんの原作でなにかやりましょうと言ってくれて。劇団でやった短編集のひとつが、連載漫画にできそうな設定だったことから始まりました。

――演劇が映像や漫画に広がっていったんですね。

芝居だと、条件がアイデアを生んで、話の設定ができあがることもある。演劇でつくるからこそ発想した物語の根っこって、すごく面白いと思う。

あと、とりあえず形にしてみることなら演劇は一番早いし、クリエイティブな自由が保証されている場所です。ここから面白いものが生まれて、漫画だったり映画だったりテレビドラマだったり、全く別の形に出していくってアリだなあと。「これってどこでつくられたの?」「元々は演劇なんです」っていうものが、もっと増えていくといいと思う。

――セミナーの講師として授業では、生徒さんにどういうことを伝えてますか?

セミナーにはほんとにいろんな方がいますよね、年齢層もばらばらで。でもみんな熱心で食いつくように聴いてる。ぼくの授業のパターンとしては、こういうふうにやってきた、自分の経験の中でこれはすごく力になった、そういう話をしています。この時期にはこんな迷走もしたよ、とも話します。

――受講を迷っている人になにか伝えることはありますか?

劇作家志望の人にはもちろんなんですけど、俳優とか演出家とか制作とか、演劇に携わる人みんなに勧めたいです。演劇の一番根っこが戯曲だから、その理解を深めるためにも。

映像をやる人にも役立ちます。会話だけで成立させることを学んでいける。小劇場から深夜ドラマの脚本とかに引っ張られることもあるようですね。

あと、戯曲って趣味になるじゃないですか。映像シナリオを趣味で書く人はいないけど、戯曲の場合は、書いて友だちで集まって声に出して読めば一応完成する。ものすごく可能性があるものならそこからぱっと広がっていく。

なにかを始めるためにいい場所なんじゃないかなと思いますね、戯曲って。

前川知大　イキウメ
劇作家、演出家。1974年生まれ。新潟県出身。2003年に「イキウメ」結成、2013年より「カタルシツ」開始。2010年『関数ドミノ』『奇ッ怪〜小泉八雲から聞いた話』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、紀伊國屋演劇賞個人賞、2011年『プランクトンの踊り場』で鶴屋南北戯曲賞、2012年『太陽』で読売演劇大賞・最優秀演出家賞、読売文学賞。2005年初演の『散歩する侵略者』は舞台として再演を重ね、2007年に小説、2017年に映画・TVドラマ公開(黒沢清監督)。『太陽』は、劇団での再演に加え蜷川幸雄氏の演出でも上演、2016年に小説および映画公開(入江悠監督)。スペイン語、韓国語、ロシア語、中国語、エジプト語、英語に翻訳されている。2022年『À la Marge(外の道)』ではフェスティバルドートンヌ正式プログラムとしてパリ公演を行った。

広がる、劇作家の世界。書くことから、始まります。

オンライン講座　受講生の声

鎮西祐美(ちんざい)さんは秋田県在住。2021年度、さらに2022年度にオンライン講座を受講しました。

――2年続けて受講されるのは珍しいですが、どういうモチベーションから?

常に情報を得られる環境に身を置けるのがいいと思って受けました。私は秋田が拠点で、地域では、一緒に活動する仲間がいれば、好きなようにやってもそれなりにできてしまうんです。けれどどこか足りないなって思ったときに講義を聞くと、足りなかったものが見えてきます。

――フルタイムでお仕事をしながら演劇活動もして、さらにセミナーまで。

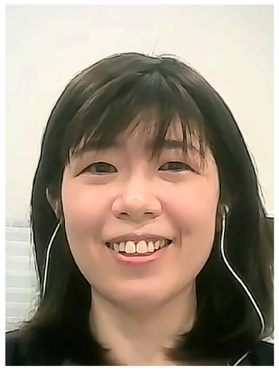
土日に子どもを夫に見てもらいながらアーカイブを見ました、1年目はオンライン交流会にも出て、高校演劇の先生とか、これから演劇で食べていこうとする若者とか、いろんな熱意に出会ってとても励まされました。私は仕事にすべてを傾けるわけでもなく、演劇に命をかけてるわけでもなくて、半端者の感じがずっとあったんです。でも両方を抱えているからこそ、私は社会と接続できていたんだって感じました。

――印象に残っている講義はありますか?

高橋知伽江さんの講義でミュージカルに開眼しました。歌ってすごい。時間軸を凝縮して作品や人物の設定を説明できたり、離れた場所にいる二人の心が繋ぐことができたり。鹿目由紀さんの講義では、短編の中でひとつの流れをギュッと見せていくことを学びました。七つの台詞で短編を作りましょうっていう課題もありました。自分で書くにあたってアーカイブで集中的に見直した講義もあります。

――セミナーを受講する前と後で、変化したところは?

注意深くなりましたね。たとえば台詞がもったりしてると思ったときは情報を詰め込もうとだけしているとか、気づけるようになりました。あと、講師の先生方が、まず台詞を誰かに声に出して読んでもらいなさいっておっしゃるのを聞いて、もう10年以上続けている劇団の仲間のありがたさを噛み締めるようになりました。

――受講を迷っている方にメッセージがあれば。

受講料が理由で迷っているのであれば、受けたほうがいいです。絶対に損はしません。食べていくための道が見えないとか、ひとりで書いて自分の演劇がこれでいいのかわからない人、それに観客の方も、必ずハマる講義があると思います。一生の観劇体験につながる知識をもらえます。人生のどこかでは凝縮して勉強した方が、演劇って絶対面白いなと、セミナーを受講した方が思いました。